

ぱびるす

臨時号
2021.9.22
京大職組
図書館職員部会

退職の弁

松延 秀一

当方は二〇二一年三月、附属図書館学術支援課を退職した。一九九五年四月に本学に戻って以来お世話になった方々に対し、ここで厚く御礼申し上げる。

思い返せば、一九七四年に本学文学部に入学、大学院を経て、一九八四年に、当時箕面市粟生間谷に移転して間もない大阪外国語大学(現在は大阪大学の外国語学部。千里中央近くへ再移転)の図書館に就職して以来、三十六年に及ぶ図書館員生活を終えたことになる。

当方は国家公務員(図書館学)上級乙種採用試験に合格して人事院の名簿に登録されたものの、難聴の故か採用先がなかなか決まらず、年度末近く、大阪外大が拾ってくれたので、これは幸運なことであった。もちろん、正規職員であった。一九九五年、阪神・淡路大震災の年であるが、その年の四月に本学へ戻り、以後、学内異動も経験して、六〇歳でいったん定年退職、その後すぐ再雇用され、六五歳に達した年の年度末

で退職したわけである。六〇歳台後半の高齢者であるが、そう見えるかどうか。

仕事の内容は、貸出窓口対応ではなく、目録であった。請求記号を決定し、目録記述を行った。当初はカード目録だった。外大では、NDC 6版を基に7版、8版を併用、和洋混配であった。当時は和文タイプもあり、カード専用のコピー機もあった。手作業時代としては、最先端だったろう。一方、外大に採用されたその年、NECの図書館システムが導入された。ただ、カード出力のプログラムはついておらず、カスタマイズとして、カード原稿が出力できるようにしてもらった。この時点では、まだ全国のネットワークは未整備であった。当初、大阪外大は阪大を経由する構想であったが、それは実現に至らず、現在のように、参加組織が直接全国のセンターに接続する形となった。これには、Windows95の登場や、インターネットの普及が大きかったことであろう。本学のilisにしても、一九九八年以降はiliswaveとなった。本学に戻ってからは、学内異動も

経験した。宇治↓吉田南↓農↓文、そして附属である。文学部在職中、事務統合で文系共通事務部ができたが、そちらには行ってない。一番長かったのは吉田南(人環・総人)で十年近く、次いで、文に定年をばさんで七年であった。ここでも目録の仕事だった。ただ上級職採用ではあったが、異動回数は少なめで、掛長になることはなく、定年間際、主任という肩書はもらったとはいえず、昇任はなく、結局はヒラで終わった。ただ聞かえない当方にとってはヒラのほうが気楽だったかもしれない。当然給与はそれほど高くないからなかつた。そのため、再雇用は五年満期勤務した。再雇用期間の文から附属への異動は想定外だった。

学外では、日本図書館協会(JLA)の障害者サービス委員会委員となつた。こちらのほうでは、一九八六年に東京で開かれたIFLA(国際図書

館連盟)大会に参加、日本の聴覚障害者に対する図書館サービスの現状について英文原稿を用意して報告もした。国立国会図書館関西館が設立された後、関西館とJLAの共催で障害者サービス担当職位向け講座の講師を数年間つとめたこともあった。

前述したように、当方は聴覚障害を有する。電話や会議は困難である。退職の際の学術支援課全体の送別会(昼食会)はコロナ禍のこともあり、中止してもらったほどである。多数のおしゃべりの輪の中では孤立するからである。その代わりというか、本学の手話サークルには顧問となつて例会には参加した。コロナ禍で、課外活動ができなくなったのが気がかりである。

組合には一員として加入していた。前述のように聞かえにくいので、組合活動には参加しなかった。手話のできる(通訳とまでは言わぬが)組合員がいれば顔出しくらいはできていたかもしれない。それでも、文で定年を迎えた時、文系共通所属の組合員からは、居続けただけでも心強かつた、と言われた。脱退しなかつたというだけでもありがたかつたのであろう。「数は力なり」である。障害者福祉施策の要求でもそう思う。

退職したが、ヒマを持って余すとかいうことはなく、聴覚障害者にかかわる歴史研究も行っている。学生時代は文学部史学科に所属していたので、昔取った杵柄、まあ日曜大工ならぬ日曜歴史家というところか。いま、近畿聾史研究グループというサークルに入っている。「聾史」と称しているのは、それが短くてすむため、「聴覚障害者史」と称するとだともどろっこしいであろう。なので、今でも、ときどき、附属の一階と二階には出向いているので、姿を見かけた人もおられるかも……。当分、他部局も含め、利用者としてお世話になることであろう。

2021年3月末でご退職された松延さんから、職員生活を振り返るご寄稿をいただきました。
「ぱびるす」臨時号としてご紹介します。

